

メッセージ 2

かづけてくださる方としてのキリストの中で、
いっさいの事柄を行なう秘訣を学び、
わたしたちはキリストを生き、
キリストを大きく表現し、キリストを獲得して、
召会の中で彼に栄光を得させる

聖書：ピリピ1:19-21前半、2:2、3:14、4:6-8、11-13

I. パウロは、かづけてくださる方としてのキリストの中で、いっさいの事柄を行なう秘訣を学びました——ピリピ4:11後半-13：

- A. 「秘訣を学びました」という句は、パウロが新しい状況、新しい環境の中へと入って来ていたことを示します。わたしたちは新しい環境の中に置かれるときはいつも、その環境の中で生きる秘訣を学ぶ必要があります。
- B. 「わたしは……秘訣を学びました」は、文字どおりには「わたしは入門しました」を意味します。ここの比喻は、人が秘密結社に入門して、基本原則を教えられることを指しています。
- C. パウロはキリストに回心した後、キリストの中へと、またキリストのからだの中の中へと入門しました。そして、どのようにキリストを命とするか（コロサイ3:4）、どのようにキリストを生きるか（ピリピ1:21前半）、どのようにキリストを大きく表現するか（20節）、どのようにキリストを獲得するか（3:8、12）、どのように召会生活を持つか（1:8、19、2:1-4、19-20、4:1-3）の秘訣を学びました。

II. 信者たちは弟子たち、学ぶ者たちであり、秘訣を学びつつあります。その秘訣とは、実際はイエスの中にあるので、キリストを学ぶことであり、それは実際の霊に、彼らを四福音書に記録されているようなイエスの生活の実際の状態の、すべての実際の中へと導いていただくことによります。その生活において、イエスは、神の中で、神と共に、神のためにすべてのことを行ないました。神はイエスの生活の中におり、イエスは神と一でした——ヨハネ16:13、エペソ4:20-21：

- A. キリストに従う者たちは、神・人の原型としての地上でのキリストの人の生活（人性においてご自身を否むことによって神を生きること）を通して弟子に構成されました（ヨハネ5:19、30）。それは人についての彼らの観念を徹底的に変えました（ピリピ3:10、1:21前半）。
- B. キリストは人性においてご自身を否むことによって神を生きたので、「受けた苦しみによって従順を学ばれ」（ヘブル5:8）、「死にまでも、しかも十字架の死に至るまでも従順になられました」（ピリピ2:8）。
- C. わたしたちがキリストの模範にしたがってキリストを学ぶのは（マタイ11:29）、わたしたちの天然の命によってではなく、復活における彼の命によってです。その命は従順の命です。弟子とは、自分の人の生活の中で神聖な命を生きる者です。
- D. 「わたしは回復の中で、ウオッチマン・ニー兄弟がどのように行動したかを十八年間、観察してきました。わたしが彼において観察したことはすべて、わたしを弟子に構成するものとなりました」（ウイットネス・リー全集、1994年—1997年、第

5巻（上）、「バイタルグループ」、第2編）。

- E. わたしたちは主の弟子、彼の学ぶ者として、神の恵みとしての彼の訓練の下に絶えずいます。神はまたわたしたちに、「わたしたちの救い主・神の慈しみと、人に対する彼の愛」として現れました。この恵みは、「わたしたちを訓練して、不敬虔とこの世の欲を否み、今の世にあって、冷静に、義しく、敬虔に生活するようにさせ、祝福された望み、すなわち、わたしたちの大いなる神また救い主、イエス・キリストの栄光の出現を待ち望むようにさせています」——テトス3:4. 2:11-13。
- F. 召会生活における姉妹たちは主の弟子であるので、老年の姉妹たちは主と一になって若い姉妹たちを訓練して、「夫を愛し、子供を愛し、冷静な思いを持ち、純潔で、家事に励み、善良で、自分自身の夫に服従する者とならせ、神の言がそしられることのないようにする」べきです——2:3-5。
- G. わたしたちは主の弟子として、主の言葉に従い、「どういう意味なのか、行って学んで」くる必要があります。神はあわれな罪人にあわれみを示すことを願っているので、わたしたちが愛の中で人にあわれみを示すことを欲しています——マタイ9:12-13. ミカ6:6-8. マルコ12:33。

**Ⅲ. ピリピ第4章の秘訣は、わたしたちを力づけてくださる方としてのキリストの中で、
いっさいの事柄を行なうことです——ピリピ4:13. 詩歌564番（英文）：**

- A. パウロはキリストの中にある人であり（Ⅱコリント12:2前半）、他の人によってキリストの中に見いだされることを願いました。ピリピ第4章13節で彼は、キリストの中で、すなわち彼を力づけてくださるキリストの中で、いっさいの事柄を行なうことができると宣言しました。これはキリストに対する彼の経験についての、すべてを含む、結論の言葉です。これは、わたしたちと主との有機的な関係についての、ヨハネ第15章5節における主の言葉、「わたしを離れては、あなたがたは何もすることができない」の逆です。
- B. パウロは完全に、ユダヤ宗教の中で、律法の下にあり、常に他の人によって、律法の中に見いだされてきました。ところが彼の回心の時に、彼は律法と以前の宗教から、キリストの中へと移し入れられ、「キリストの中にある一人の人」となりました——Ⅱコリント12:2前半。
- C. 今や彼は、彼を観察するすべての人によって、キリストの中に見いだされることを期待しました。これが示しているのは、彼の全存在がキリストに浸し込まれ、キリストで浸透されて、彼を観察するすべての人が、彼を完全にキリストの中に見いだすのを、彼が熱望していたということです。わたしたちがキリストの中に見いだされるときにのみ、キリストは現され、大きく表現されます——ピリピ3:9前半. 1:20。
- D. 一方で、キリストが力づけることによって、わたしたちは満ち足りた生活をすることができます（4:11-12）。もう一方で、キリストが力づけることによって、わたしたちは真実であり、誉れがあり、義であり、純粋であり、愛らしく、好評であることができます（8節）。
- E. 力づけてくださる方としてのキリストについてのパウロの言葉が特に適用される

のは、キリストがわたしたちを力づけてくださり、わたしたちがわたしたちの人性の美德としての彼を生き、それによって彼の無限の偉大さの中で彼を大きく表現することにおいてです。これらの美德の生活をするには、キリスト教の働きを行なうことよりはるかに難しいのです。

IV. 力づけてくださる方としてのキリストの中でいっさいの事柄を行なう実行上の道は、ピリピ第4章6節から7節に見いだされます、「何事にも思い煩うことなく、あらゆることにおいて、感謝をささげることを伴う祈りと願い求めによって、あなたがたの要望を神に知らせなさい。そうすれば、人知をはるかに超えた神の平安が、あなたがたの心と思考を、キリスト・イエスの中で護衛してくださいます」:

- A. キリストご自身が、人知をはるかに超えた神の平安です——イザヤ9:6. ヨハネ14:27. ルカ7:50. ローマ3:17. 5:1. 8:6. 15:13. 16:20。
- B. 「神に」は、ある方向の動作を示し、生ける結合と交流の意味であり、交わりを暗示します。ですから、ここの「神に」の意味は、「神との交わりの中で」ということです——ピリピ4:6。
- C. 祈りの中で神との交わりを実行した結果は、わたしたちが神の平安を享受することです。神の平安は實際上、平安としての神であり(9節)、わたしたちが祈りによって彼と交わることを通して、悩みの均衡をとる重り、思い煩いの抗毒剤として、わたしたちの中へと注入されます(ヨハネ16:33)。
- D. 平安の神は、キリストにあるわたしたちの心と思考の前を巡回して、わたしたちを落ち着かせ、静めてくださいます(参照、イザヤ30:15前半)。わたしたちは思い煩いのない生活をしようとするなら、わたしたちのすべての環境が、良くても悪くても、神によって定められたものであって、わたしたちがキリストを獲得し、キリストを生き、キリストを大きく表現するという定めを成就させることを、認識する必要があります(ローマ8:28-30. マタイ10:29-31. IIコリント4:15-18)。

V. 力づけてくださる方としてのキリストの中で、いっさいの事柄を行なう秘訣を学ぶことは、「祈って主と行き来し、交わ」ることです(詩歌568番、全訳)。彼はわたしたちの王、主、かしら、夫です。神と接触する祈りは、真に心から語られた言葉から成っています:

- A. わたしたちは、悲しみ、意気消沈、失望の状態にいるかもしれません。わたしたちは自分の問題を主にもたらし、それについて彼に告げるべきです。彼は最上の聞き手です。彼はわたしたちの感情を知っており、わたしたちの心に同情します。彼はわたしたちを慰め、助けることができます。
- B. わたしたちが認識すべきなのは、主との徹底的な会話を持ち、自分の心を彼に注ぎ出すとき、わたしたちと主との親密さがさらに一段階進み、彼をさらに少し知るということです。これらの時の彼との親密な接触は、わたしたちと彼との通常の交わりより何百倍も良いのです。これらの接触によって、わたしたちは命において成長します——詩62:6-8. 56:8. 参照、サムエル上1:15。
- C. もし人が決して主の御前で涙を流したことがなく、自分の喜びや悲しみを決して主と分かち合ったことがなく、自分の個人的な事柄について決して主に話したことがないなら、主とのいかなる親密な交わりも決して持ったことがなく、主との

いかなる深い行き来も決して持ったことはありません。人はすべてを主に告げることを通してのみ、主により近く引き寄せられることができます。

- D. 彼はわたしたちの一つ一つの問題に同情してくださいます。わたしたちの主は進んでわたしたちのすべての思い煩いを担い、わたしたちが語ることを喜んで聞いてくださいます。わたしたちは主を命の生ける水として享受するために、わたしたちの霊の岩としての彼に語る必要があります——民20:8. I コリント10:4. 出17:6. 詩歌202番。
- E. 詩篇第102篇のタイトルは言います、「苦しむ者の祈り. 彼が弱まり、自分の苦情 [不平] をエホバの御前に吐き出しているとき」。わたしたちは神に不平を言うかもしれませんが、わたしたちの不平は最上の祈り、神に対する最も喜ばしい祈りとなるかもしれません。わたしたちが不平を言っているとき、神は歓喜していません。なぜなら、彼はすべてを共に働かせて益とならせているからです。それは、わたしたちが彼の御子のかたちに同形化されるためです——ローマ8:28-29。
- F. 詩篇第73篇は、尋ね求める詩篇の作者の誠実な祈りの記録です。彼は自分自身の苦難によって、また悪しき者の繁栄によって、つまずきそうになっていました。彼は、むなしく心をきよめたと考えました。なぜなら、彼は物質の繁栄を享受したのではなく、終日、災難に遭い、朝ごとに懲らしめを受けていたからです——詩73:12-16 :
1. 悪しき者の繁栄に関する詩篇の作者の困惑に対する解答は、神の聖なる所で得られました (17節)。第一に、神の聖なる所、彼の住まいは、わたしたちの霊の中にあります (エペソ2:22)。第二に、神の聖なる所は召会です (I テモテ3:15)。神の聖なる所の中へと入って行くことは、わたしたちの霊に戻り、召会の集会と務めの集会に行くことです。わたしたちの霊の中と召会の中で、わたしたちは神聖な啓示を受け、わたしたちのすべての問題に対する説明を得ます。
 2. 主を尋ね求める者は、主との正直な会話と、彼が神の聖なる所の中へと入ることを通して、最終的に主によって照らされて、主にこう言うことができるまでになりました、「わたしは天であなたのほかにはだれを持つでしょう？ 地ではあなたのほかには慕うものはありません。わたしの肉と心は衰えますが、神は永遠にわたしの心の岩、わたしの分け前です」——詩73:25-26。
 3. 神を尋ね求める者に対する神の意図は、彼らがキリストの中にあらゆるものを見だし、彼ご自身を絶対的に享受することからそらされないことです。神のエコノミーにおける神の究極の願いは、わたしたちがキリストを生き、キリストを大きく表現し、キリストを獲得して、召会の中で彼に栄光を得させることです——ピリピ1:19-21前半. 3:7-8. イザヤ43:7. I コリント10:31. 6:20. I ペテロ4:11. エペソ3:16-21。